

# 話しことばの表現

大石 初太郎

## 1 話しことばの非合理性

人間はコミュニケーションの手段として、ことばを与えられた。とりわけ、そぼくな話しことばは、耳や口の器官に故障のないかぎり、すべての人間にひとしく与えられた、もっとも基本的な人間能力の一つである。

だが、その話しことばは、われわれのコミュニケーションのために、社会的共同生活のために、はたして完全な手段だと言えようか。ことばによってわれわれは社会生活を成立させ、ことばによってわれわれの精神が基本的に形成されていることはよくわかるが、具体的な個別の時・所においては、話して通ぜず、しばしば、ことばによって憎みあい、そむきあうというのが、われわれの生きている上の事実ではないか。

ことばは通じない！ それは、ことば以前に人間があるからだ。ことばは合理的精神の産物であり、ことばを使う行為は本質において合理性を追求する行為であるにちがいないが、悲しいかな、個々の人間は、はなはだしく非合理的な、喜怒好悪の感情ですっぱり包まれた、そういう自分の立場でしかものを見ることのできない、狭い精神である。

一方また、ことばは思想や感情そのものでは決してなく、そのレッテルにすぎず、中味は人とともに相違して、相反する思想が同じことばを通じて語られもする。ここにことばの根本的な無力さがある。そういう人間のあり方、ことばのあり方が、しばしば話のゆきちがいをひき起こし、いくら話しあっても“わからない”という状況を作り出す。

私は今、話しことばの表現がどういう言語的構造をとってなされるかということをおもなテーマにしようとして、ペンを取っている。それにしては、いささか見当違いなことを言いだしたようにも思われるが、ことば、とりわけ話しことばの考察に当たってはその機能をかけ値なしに見すえてかかることが必要だという思想によるのである。この思想は、一方、生活態度・人生観につながるものであり、他方、言語生活の改善を究極のねらいとすることばの研究の態度につながるものである。

さて、非合理性——合理性を追求してつねにその失敗としてあらわれる非合理性——それが人間の常態であり、ことばの常態であるといえようが、それはとりわけ、話しことばにおいて著しい。それはことばの形・構造の上にも、実は明らかに指摘されるところである。

ソレカラマタ アノー エー 小サイオ子サンナンカニハ  
コンビネーション 上カラズーット下マデ続イテイル下着ノ  
ヨウナモノガゴザイマスネ シュミーズトブルマースガ続イ  
テルヨーナ形デゴザイマス デ コノコンビネーション型ノ

ヨウニ上カラ下マデズーット一枚ニ続イテオズボンマデノガ  
ワンピースナッテル形デゴザイマス

女性講師によるラジオの講義の1節だが、これは1文か2文か、あるいは3文、4文の連続か。認めようによって相違がありうるものと思われるが、話し手は文法意識のはっきりした規制のもとにしゃべりきったものと思われ<sup>ない</sup>。思想をはじめからきれいに料理しきれなかった破綻<sup>たん</sup>がことばの上に露呈されているとも見られる。

男ノ子モ女ノ子モ ベツニ アノー 色ノ規定ハゴザイマセ  
ンカラ ヤワラカーイ カワイイ色 アルイハ アマリ 強イ  
色ヤナンカッテイウノハヨクゴザイマセンノデ……

一の音節が特別に高められ、それに先行する音節は特に低く発音されて、その語が強調されているという印象が著しい。このような特別な音声変化は、ことばのすき間からふき出す、合理化以前のなまのもの、直接的なものを感じさせる。

以上のあたりに、話しことばの特徴らしいものをわれわれは感じるが、このような具体的な発話から話しことばの特徴を抽象するに先だって、その大部分が、話すという言語行動の負う条件・性格にかかわるところがあると見られるので、まず話すという行動の性格を大づかみにおさえることから始めよう。

## 2 話すという行動

話すという行動は、聞き手を相手とする話し手によって起こさ

れる、音声による表現の行動である。——ことに、場面と手段とが規定されている。

「聞き手を相手とする」ということは、話しことばの場面を説明したもののだが、この相手のあり方が、話すという行動のありようを導き、ことばの構造をきめるところがきわめて大きい。

「音声による」は話しことばの手段を言ったもののだが、この手段がどんなに活用されるかが、注目されねばならない。

#### (1) 相手のあり方

聞き手としての相手は、話し手にとって現前する。すなわち、相手が見える、あるいはその声が聞こえるなど、感覚的にとらえられる対象として存在するのが普通である。その中で、相手が目前にいるのが、もっともあたりまえの状況である。そして、現前する相手からは、何らかの形による即時的反応——応答・反問・相づちなどのことばや、表情・態度など——があり、それによって話し手は影響され、制約を受ける。これが対話の様相である。また、やり取りでなく、一方的に話すばあいも、やはり何らかの相手の反応が話し手にはたらきかけるのがふつうで、その意味で、そこにもいわば対話性がひそんでいるといえることができる。対話性——これは話しことばの基本性格の一つで、話しことばの構造がこれによって説明されるところが大きい。

相手が目前にいるという状況においてはまた、表情・身ぶりなどの身体的変化による表現がことばに随伴する。人間の表現行動は、ことばだけによるものではない。ことば以外の記号・信号

の、社会習慣となっているものもある。また、自然的な心情に根ざして、直接的にあらわれ、共通の心情に基づいて理解されるような、記号以前の表現手段もある。われわれの表情・身ぶりなどの中にも、そういう記号的なものもあれば、記号以前の訴えもある。そして、それらがことばと同時に、意図的に、あるいは無意図的に行なわれるのが常態である。表情・身ぶりとの関連においてことばの構造——語の選択や文の組み立て——のきまるところもある。表情・身ぶりそのものはことばの外のものだが、表現行動として話しことばを取り上げるときには、これを無視しえないばあいがある。

相手が目前にいるという状況においては、もう一つ、その場の物理的事態が表現のために利用されるところのあることも、無視できない事実である。ある範囲を物理的事態としての場面にまかせてことばが節約される、すなわち場面によりかかった表現をするということも、よくあることである。

## (2) 音声による表現

音声による話しことばの表現は、瞬間瞬間に聞き手の聴覚を刺激しながら時間とともに流れ去って、ある程度記憶にとどまるということはあるけれども、空間的に定着されることがない。したがって、その刻々ととらえる以外にとらえようがない。これは、話し手にとっても聞き手にとっても、きびしい条件である。話し手は、みずからの上に加えられているこの制約にしばられざるをえないと同時に、相手に加えられているその制約への配慮をもって、表

現の上に、多かれ少なかれ、くふうを試みることにもなる。それが用語や文の組み立てなどの上にあられる。たとえば、話しことばにおいては、概して文の組み立てが単純である。かつ文が短いというのは、時間性の制約のもとにある話し手の構文能力の産物としての自然であると解釈されるし、わかりやすい話しことばのための最も大事な条件ともされるのである。これらのことは、話しことばの表現の特徴として、さらにのちに詳しく述べなければならぬ。

なお、音声による表現ということでは、音声そのものの表現のはたらきが注目される。ことばはすべて音声による記号の体系であり、その運用だといえるが、実現としての話しことば、すなわち発話においては、記号以前と考えられる具体的な音声変化が複雑に加わって、個別的表現を成立させる。ここには身ぶり・表情などと、ある意味で同列と思われる要素があるが、話しことばの表現について見ようとするときには、絶対に見のがすことができない。これについても、節を改めて述べなければならぬ。

話すという行動の負う条件・性格として、以上のように、対話性と時間性が指摘され、身ぶり・表情や具体的な音声変化がことばと同時に はたらき、物理的事態が利用されることが注目される。これらが話しことばの表現を制約し、特色づけるのである。

### 3 音 声 表 現

発話の外形は具体的な音声連続だが、その音声連続の正体は何かと考えると、まず第一に、それは記号としてのことば（言語記号）の形式の実現である。言語記号の形式をなすところの音素の組み合わせとアクセントの型（少なくともこの二つ）が、物理的、生理的な音声において実現されたものがそれである。たとえば、発話「アリガトウ」は、いつ、だれが、どんなふうに言っても、同一のことばだといえる。というのは、どの「アリガトウ」も自分は感謝するという意味に対当する一つの音素連続とアクセントの型の実現と見られるからである。

ところが、具体的な「アリガトウ」の正体は、それだけにとどまらない。だれかの肉声をもって個々の場面で発せられる「アリガトウ」は、暖かく聞こえたり冷たく聞こえたり、また、明るく聞こえたり暗く聞こえたりする。時には、それが言語記号としての意味とは逆の、皮肉や軽蔑<sup>べつ</sup>や不満を表わしたりもする。これがわれわれの生活の中のことばの実情である。そういう聞こえの違いが、声の具体的な変化の上にある。そういう声の具体的な変化は、記号としてのことばの形式の外のものだが、記号としてのことばの形式の実現に必ず随伴するものである。

すなわち、話しことばの具体的な音声は、言語記号の形式としての音素連続＋アクセントの型の実現であると同時に、言語記号以前の、むしろ直接的な表現の働きをする音声変化でもあるので

ある。すなわち、具体音声に、記号要素の面と表出要素の面とがある。前者を記号音声とよび、後者を表出音声とよぶことにする。

記号音声は言語の本体に属するものであり、表出音声は言語に対して付随的のもの、表情・身ぶりなどと同列のものとも一応考えられるが、話しことばの表現に関しては、軽視することのできないところがある。具体的な生活場面でのコミュニケーションのためには、表出音声がかけがえのない大事な役割を果たすことが多いからである。ことに、ことばのやり取りにつねにまつわる情緒的なものの表現をいかにこれが有力にになうか、これはいうまでもない。相手と対面しない場合は、表情・身ぶりはまったく働かないが、表出音声はどんな場合にも話しことばから切り捨てられることはない。その意味で、表出音声の話しことばへの密着度は、表情・身ぶりのそれに比べてはるかに大きい。（記号的性格のものとするべきか、表出的性格のものとするべきか、判定のむずかしいものが、たとえばイントネーションのある種のものなどにある。その点からは、記号音声・表出音声という区別に問題がないわけでもない。）

こういふわけで、表出音声は重視されなければならないが、これを分析して体系化するということは、きわめてむずかしい仕事である。それは、人間という存在・事実を分析し体系化することの困難に通じるものがあるといえよう。なぜならば、表出音声は人間の生理的・心理的な内面変化に直接に結びつくところが多く、



主として、人間の内的変化の反映としてあらわれるものだからである。だが、それがお互いに通じるということは、共通の人間性にもとづくものであり、その意味で、そこに客観性はもちろんあるわけだし、そうとすれば、分析・抽象の可能性がないというものでは決してない。われわれは日常体験の中で、さまざまな表出音声を、話す立場でも聞く立場でも自由に操作しており、それについての反省をもつこともでき、その改変を企てることも、ある範囲において可能である。

言語学的な分析・体系化が困難であっても、ある範囲については、今後努力をもって開発が進められなければならない。また、生活的目的の立場では、実践的な把握<sup>は</sup>によって、個人的、社会的な改善がはからなければならない。

表出音声は、音声としてどういう構造をもつか。それは、音声の高低・強弱・長短・断続・音色等の要素のさまざまな複合的実現である。イントネーション・プロミネンス・音象徴・模写・主観音声・節奏・間（ま）など名づけられる各種の音声変化がその中にある。それらのさまざまな組み合わせによって、話しことばの表出音声は構成される。

次に、その中のイントネーション・強調音・間などについて、少し観察してみよう。

#### (1) イントネーションについて

問題を限定して、文末のイントネーションだけを取り上げる

ことにする。

アシタ クル\

ど、文の末尾が自然にさがるような調子でいうか、

アシタ クル/

と、特に文の末尾を上げる調子でいうかによって、文のふくむ意味が変わることがある。たとえば、しばしば、前者は平叙の表現、後者は質問の表現、と対立しうる。

また、質問の一種であるが、相手のことばに対する問い返し、すなわち反問のばあいは、クルの末尾に長音（半長音）が加わって、その長音（半長音）の上にしり上がりの調子の実現され、そのために一度下がって上がるという聞こえを著しくすることが多い。これを

アシタ クル/

のように示すこともできる。

（補）

「アシタ クル/」も末尾の実際の音声は、一度下がって上がるのだが、このばあいのはアアクセント（クル）によるものなので、さらにそのあとに加わる上がりだけに注目して/ととらえるのである。「アシタ クル\」は、アアクセントの下がりにさらに下がりが加わるものとの解釈による。この加わる下がりには、言い納めの生理的自然にもとづく声の調子の減衰によるものである。

「アシタ イク\」のばあいは、アアクセント（イク）の関係

で、末尾は実際にははっきりした下がりをもたないことが多い。しかし、それでも言い納めの自然下降があると解釈して、と認定する。

↘も右の解釈にもとづく。「アシタ クル↘」の下がり部は、アクセントの下がりにさらに加わる下がりであり「アシタ イク↘」の下がり部は、実際にはほとんどないものであっても、それは解釈による自然下降である。そしていずれも、相手の言い納めの下降に当たるものだと考えることができる。つまり、↘は、相手のことばの言い納めに現われる（はずの）自然下降の模写↘に話し手の質問の↗が重ねられて成り立ったものとも説明されよう。反問の意味的構造からそのように言える。

「トテモ シズカダ↘」「マダ カエルマイ↘」は成り立つが、

「トテモ シズカダ↗」「マダ カエルマイ↗」は成り立たない、ということは、これらの形式が平叙の表現には使われるが、質問の表現には使われないということである。平叙の表現を受けてそのまま問い返せば↘となる。

イントネーションの↘と↗との対立は、必ずしも、意味の平叙と質問との対立に対応するものではない。

イツ イク↘

イツ イク↗

イクンデスカ↘

イクンデスカ↗

は、イントネーションの相違にかかわらず、いずれも質問の表現である。また、

アメガ フル↘

も、場面文脈などによって、質問の表現となりうる。さらに

イツ イク↘

イツ イク↗

イクンデスカ↘

イクンデスカ↗

においては、平叙・質問とは別種の対立があることが見られる。

それは

ココデ マッテラッシャイ↘

ココデ マッテラッシャイ↗

ソーデスヨ↘

ソーデスヨ↗

などについて見られるものとも同じである。

↘は一方的な態度で述べる、あるいは、相手に対して強い態度を取る。↗はもちかけの態度で述べる、あるいは、相手に対してやわらかい態度を取る、というような態度の違いを示すと言えよう。質問の↗も、根本的には、右と別のことではない。質問が相手への要求の表現、すなわち、もちかけの一種であることを考えれば、うなずかれるところがある。また、同じく要求の表現である命令が、これに反して、↘を取ることの多いことも、相手に臨む態度の強さの相違として理解される。↘が男性的、↗が女性

的という傾向的相違，子どもへの話しかけ（お話など）に↗の多いことも，注目される。

ある男性どうしの雑談と女性どうしの雑談とについて調べてみたところ，男性で文の30.1%が↗を取り，女性で文の40.4%が↗を取っていた。質問的表現でも女性のほうに↗のものが多いためである。対照的な例を上げてみると，

(女) ナンカ スゴクカガイルンジャナイ↗

スズメグライドショウ↗

チョウド何人グライ来テルノ↗

コトシハ飲マナカッタ↗

(男) アレヲ マネシタンダッテ話ジャナイ↘

一番最初ニマンガフッタデショウ↘

ソナニ ヒドイノ↘

泳イデルトコロ写ッテル↘

いずれにしても，文の末尾のイントネーションが文の意味，話し手の態度を表現するはたらきをもつ点は重視される。しかも質問の↗や平叙の↘のような，論理的表現の要素とも見られるものについては，表出的性格のものというよりも，記号的性格のものというべきかというような問題も起こる。

## (2) 強調音

NHKラジオの「わたしはだれでしょう」という番組で，

アナ わたしは一生の間にただ一編の小説しか書きませんでし

たが、世界じゅうに風のようにひろがり……

解答者 マーガレット・ミッチェル！

アナ そうです。どうも「風」のところに少し力を入れすぎたかと自分でも思いましたが、そこでおわかりになりましたか。

**カゼ**ノヨウニヒロガリ……と「風」を特に強調したために「風とともに去りぬ」の作者が思いつかれたのである。このように、文中のある語（あるいは語連結）を音声をもって強調するやり方がある。いわゆるプロミネンスである。プロミネンスには、強めと高めとが相伴うことが多い。

特に高めるのと逆に、特に低めることによる強調もある。

タイヘン結構デス。

スゴクキレイダ。

アイツワダメダ。

これを詳しく見るとタイヘン、スゴク、アイツワのようにアクセントをもつ語が、タイヘン、スゴク、アイツワなどと高低関係を変動させ、高さのある音節に先行する部分が特に低められている。しかも力を入れて低めているという感じがある。

また、「わたしはだれでしょう」からさらに例をひろうと、

イ シ ダ ヒ ロ ヒ デ サ ン デゴザイマシタ。

というように、問題語を特にゆっくりと発音して強調するやり方もある。また、

夕方咲ク……シ ロ イ…オ オ キ ナ…花ノ名マエ。

のように、間をおき、かつ、ゆっくりと発音することによる強調のやり方もある。

また、音節をひきのばす発音法がある。前例のスゴークもそれだが、そのほか、

タークサン持ッテル。

ヒーロー野原。

キリットシタ顔ヲシテイル。

などこれらを音象徴ともいうが、やはり一種の強調である。

以上、一口に強調といってきたが、中に2種類あることが認められる。一つは、ある語を他のものと対比してきわだたせる強調で、**カゼ**ノヨーニ……、アイツワ……、イシダヒロヒデサンデ……などはそれ。もう一つは量や質を表わす語の意味を誇張する強調で、タイヘン……、ヒーロー……、キリットシタ……などがそれ。前者を「対比強調」、後者を「強度強調」とよぶ。(服部四郎博士による。)

### (3) 間(ま)

間、すなわち声の休止が意味の構成に参加することが、しばしばある。

魚津の出勤はラッシュアワーをだいぶはずれていたもので、すわるというわけにはいかなかったが、つり革にぶらさがって、新聞を読むくらいのゆとりはあった。(井上靖「氷壁」)

これは書きことばの例だが、たとえばこれを朗読するばあい、正確な意味の実現のためには、第一の読点<sup>とう</sup>の箇所<sup>箇所</sup>に最もはっきり

した間を置くことが必要である。この処置を誤ると、文意の混乱をひき起こしかねない。

〇〇党ノ…〇〇〇〇〇〇〇…デアリマス。(政見放送)

コレガジツニ…30…6回目デアリマス。(案内人説明)

のように、文節の途中や語の中間に間にはいることもある。強調の方法の一つである。

間はふつう(言いよどみ・つまずきの間は別として)、意味上の切れ目に、多くのばあい、息のつぎ目が重なって、置かれるものだが、具体的な発話の上では、一般的に、その置かれる場所に関しても、その大きさに関しても、きわめて不定である。また、必ずしもすべて表出的な意義を帯びているものとも思えない。だが、右の例に見るような、意味の上からきめられているばあい、表出的なはたらきの明らかなばあいもあって、これは軽視できない。前者は文法的な間と言えるもので、実地にはしばしば、それが確実に実現されなくても、他の表出音声要素のはたらきにカバーされてすまされるが、本来、それは望ましくないといわなければならない。後者は、話のじょうず・へたに関係するところが大きい。たとえば、徳川夢声の話術の秘訣は間にあるとか、古今亭しん生の話のうまみはもっぱら間によるとか言われる。

#### 4 話しことばの文

文の構造や成立に関する面から、次に考えてみる。

##### (1) 短い文、構造の単純な文



話しことばの文は一般的に短い、また、それと関連して、構造が単純であるといわれる。

長さについては、文節数ではかった文の長さの平均が、

日常談話	3.81
座談会	5.49
講義	9.31

(国立国語研究所報告8「談話語の実態」から)

という報告があり、同じはかり方による書きことばの文の長さ、

小説の地の文	14.4
哲学書の文	17.6
新聞記事の文	17.9

(<sup>かば</sup>樺島忠夫「文の構造について」『国語国文』1954年3月号から)

に比べると、かなりの差のあることがわかる。

構造については、特に、話しことばではあまり見られないような大きな連体修飾語が、書きことばではしばしば使われるという感じをわれわれはもっているが、構造の繁簡にこれが影響しているところは大きいと思われる。文の成分の比率を、日常談話と新聞について比べてみたもので、次のような報告がある。

	談話	新聞
主語	12.0%	12.0%
述語	26.0	15.2
連体修飾語	7.0	31.5

連用修飾語	35.7	38.7
独立語	19.3	3.5

(国立国語研究所報告8「談話語の実態」から)

日常談話と新聞とで、それぞれの連体修飾語の量の比率の違いが著しい。

話しことばの文が、書きことばの文に比べて、一般的に、短く、かつ構造が単純だということは、話しことばの行動の負う時間性という条件に主としてよるものであることは、すでに述べた。

## (2) 特徴的な形の文

具体的な発話について点検してみると、特徴的な形の文と指摘されるものが、各種ある。

国立国語研究所報告18「話しことばの文型(1)」では、話しことばの文法的研究のための基礎的作業として、文の認定についての考察を行なったまとめとして、問題になりそうな文を、次のように列挙している。

### 1 単純な文(傍線部が一文)

(1)感動詞文 「アー アー」 「アーン ソウカ」

(2)応答詞文 「ウン ウン」 「イヤ イヤ」

(3)接続詞由来の終助詞終止文 「ダケドネー モウ 取ル方  
ガオモシロクッテ」

(4)単純提示文 「ダッテネー 帰ッテ来テサ 夜 東京へ着  
イタデシヨ, ソイデ アクル日ネ 会社ノバス旅行デネ

一 行ッタンダモン」

(5)くり返し表現の一つごとの文 「アゲテ アゲテ」 「ヤッテタ ヤッテタ」

(6)述語並列表現の一つごとの文 「大通リヤナンカ出ルト 全然ダメデスカ？ 全然乗レマセンカ？」

(7)補充表現としての完全な文 「モウナイ，モウ ヤッテナ  
イ」

(8)省略文由来の慣用による完全な文 「ドウゾ コチラへ」

2 文的要素 (~~~~線部) を含む文 (——線部が一文)

(1)くり返し表現としての文節または文節連結を含む文 「墓ノ中 ハイッタコトアル？ オ墓ノ」

(2)補足の表現を含む文

i 先行の指示語に対する補足の表現 「位牌ト ソレカラ アレニ書イテアルジャナイ， アノ 石碑ニ」

ii 倒置の表現 「イロイロ アルデショウ， 雲ノ名マエガ」

iii 言い添えによる補足の表現 「山開キ， 谷川ノ山開キノ前」

(3)挿入文を含む文 「デモー ナンカ ソウイウ材料…材料ッテイウノカシラ 天火トカ ソウイウ物ガ ズイブン イルンジャナイ？」

(4)挿入的提示文を含む文 「コトシハネー コトシハ モウ ダッテ アタシタチ ホラ 妹ト夜行デ行ッテサ， 朝着イテ スグ スベッタデショウ， ダカラ モウ 飲ムヒマナンカ ナイモン」

- (5)副詞的文を含む文 「露ヲ吸ウンデショウカ、ナンカ チ  
ヨイチヨイット ツツイテマスネー」
- (6)提示語を含む文 「絵トカネ ソウイッタ アノー 趣味  
デスネ、何カゴザイマセンカ」
- (7)引用文を含む文 「ソシタラネ ウドン食べナイト思ッテ  
ウドンノネー オドンブリ持ッテ来ナカッタラネ、『ボ  
クニ食べさせナイ、ボクニ食べさせナイ』ッテ プンプ  
ン オコッテンノ」
- (8)選択要求表現文 「エー ソレジャ 新聞社ノ人間カ、社  
外ノ人間カ?」
- (9)言いなおし文を含む文 「アレハ ドウイウ意味? 日本語  
ニ イヤッ…日本語ジャナイ 東京弁ニ直スト」
- (10)反唱文を含む文 (「ソレデ イインデスカ」) (ソレデ  
イインデスカ、マダマダデスヨ)

(以上、「話しことばの文型(1)」より、例文は適宜一つずつを抜き、例文の表現の文字およびわかち書きは、読みやすさを主として、便宜改めた。)

話しことばにおける特徴的な形の文というのは、もちろん書きことばに比べてという意味を負うものであるが、それはまた、文法的基準に照らしてという意味でもあるといえよう。文法は話し手の言語運用に際しての規範であって、それに対する忠実な実現は、主として書きことばの上に認められるからである。事実話しことばにはしばしば失敗があり、そのために、「話しことばは文

法的にでたらめだ。」とか「話しことばには文法がない。」とかいうような感想ももたれるのである。しかし、書きことばにはあらわれないような、話しことばにおける特徴的な形がすべて規範にはずれたもの、すなわち、文法的誤りだと言ってしまえるかといえ、そうはいかない。共通の言語意識をもつ言語生活者としてのわれわれの判断において容認されるもの、したがってまた、文法論の立場においても、その体系的処理の対象として取り上げられるべきものが少なくないと思われる。前掲の「話しことばの文型(1)」での整理の中にも、その類のものが多く含まれている。

そのうちの二、三のものに注目してみよう。

●●●●●●●●●●●●●●●●  
接続助詞由来の終助詞終止文とは、もと接続助詞であるものが終助詞に転化して使われているものことで、例文の「……テ」のほか、「……カラ」「……ケド」「……ノニ」など、いろいろある。なお、

失ッタ汗ヲ補エバ イインデスカラ ソレ以上ノ水ヲトラナイヨウニ。

早く帰ッたら。

のような、助動詞と普通認められるものなどの転化とも合わせて、●●●●●●●●●●●●●●●●とよんでもいいと思われる。これらの中には、書きことばでも使われないことはないと思われるものもあるが、大体において話しことばにおける特徴的なものといつてさしつかえない。

●●●●●●●●●●●●●●●●  
単純提示文と挿入的提示文を含む文とは、意味的には似た構造

のものである。いずれも提示文の部分は相手の確認を求めるもので、この表現自体が話しことば的だといえる。単純提示文もそれに後接する文と意味的な連結が強く（単純提示文だけでことばを切ると、表現の中断の感が特に強い）、独立の文とするがいかどうか、問題になるものがあるが、独立の確認要求の文と扱うことにされた。

挿入文を含む文、挿入的提示文を含む文は、いずれも文脈のくずれを内に含んだ構造だといえる。くずれを含んでいるということは、規範にはずれたもの、文法的不整の文ということに通じるのだが、そうかたづけられないというのは、やはり一般の不整文とちがって、こういう構造が、話しことばで特にしばしば使われる一つの型的なものとして認められるからである。そうして、書きことばでも、使われないことはないし、時には、技巧的表現のために使われることもある。

補足の表現を含む文はいずれも話しことばにおける特徴的な形といえるが、そのうち、倒置は書きことばでもよく使われる。倒置について「意味を強めたり、ある種の感情を表わしたり、文の調子を整えたりするような表現上の要求から」なされるものというような説明が行なわれるが、それは大体書きことばでの倒置にあてはまるもので、話しことばの倒置の多くは、そういう修辭的手法以前の、一種の補充的表現で、やはり、不整文に隣接する性質のものである。しかもこういう補充的表現には主体表出性が濃く、おのずから強意や感情表現の効果がうまれるところから、意

図的な修辞手法としてもこの構造が使われるわけだといっている。これと同じようなことは、挿入文を含む文、転化性終助詞文、慣用省略文などについてもいえる。

### (3) 不整文

規範からはずれた文、いわば不整文の境界線は必ずしも明確でない。さきの転化性終助詞文や慣用省略文と、不完全な文としての省略・中断との区別は、むずかしいところがある。

挿入文・挿入的提示文を含む文、補足の表現を含む文は、いずれも不整文に隣接するものだと、さきに述べた。

そのほかにも、そういう意味での問題領域にはいるものがあると思うが、とにかく、話しことばには、省略・中断や誤用を含めて、不整文がひじょうに多い。これは話すという行動の負う制約から、当然のことである。

不整文の中には、文脈不整、ことば足らず、語の誤りないし不適、省略・中断などがあり、さらに文脈不整の中には、首尾の照応の失われたものや、語順の乱れその他がある。たとえば、

首尾の照応の失われたもの

コレガ エー ナンデス、ソノ ア 東京ナラビニ秋田県デ  
エー ヤリマシタ アー 調査ノ結果ガ書イテアリマス。

(講演)

ソノ財政ノ中味ハ ワレワレ国民大衆ガイッショウケンメイ  
働イテ収メタトコロノ税金ガ コノ財政ノ中味デゴザイマス。

(演説)

## 語順の乱れ

栃錦 コノ一番ニ 負ケ越シ ヤブレンカ 決セントイウ  
大事ナ一番デアリマス。(ラジオ)

ことば足らず

コレラノイキ方ヲモッテ デキアガッタ コノ社会制度ニヨ  
ッテ ドノヨウナ形トナッテ現ワレルカ。(演説)

国語研究所ヲ……ガ ドウイウ経路ヲヘテ生マレタカトイウ  
コトハ 先ホドノイロイロ御祝辞ノ中ニモ エー ノベラレテ  
アリマスンデ 別段 必要ナインデアリマス。(祝辞)

語の誤りないし不適

コレハ月ニーペンズツ カナラズ ヤッテイタダキマシタラ  
パデスネ イマ 日本人ノコトバニ対スル関心ガ深マッテイク  
ト思イマス。(祝辞)

エー コレハ昨年ノ オー 統計デゴザイマスガ ソビエッ  
トハ アー 一番 カヲ入レテオルノハ インドデアリマス。(ラ  
ジオ, ニュース解説)

省略・中断は例を省く。

以上のような不整文が、実地の話す・聞くにおいてはあまり気  
にならなかつたり、通達に別段さしつかえを起こさずにすむこと  
も多い。それは、話の前からの続きぐあいや、場面や表出音声な  
どによって補われるからである。そこに特に話しことばの有利さ  
があるが、といて、これはそのまま認容されるべきものではない。  
ことばの論理的表現力を高めるためには、不整文は極力排さ



れなければならない。これはことばの訓練の問題になる。

#### (4) 対話の文

話しことばを独話と対話とに分けることができる。独話とは、話し手が（多くのばあい大ぜいの）聞き手にむかって一方的に話す行為で、いかえれば一方話である。対話は、たがいに話し手となり、聞き手となってすることばのやり取りである。すでに述べたように、話しことばはその基本性格として対話性をもつといえるが、なお対話と独話について比較してみれば、文の構造や性質の上に、かなり大きな差異が認められる。きわめて大まかに言えば、独話の文は書きことばの文に近似するところがあり、対話の文はそれに遠く、もっとも強く話しことば的特徴をもっている。前述の、文の長さ、構造、特徴的な形、不整文などについてもそれぞれその傾向が指摘されるはずだが、ここでは、特に文の性質上の種類について見ることにする。

文の性質上の種類とは、文の成立に関係するもので、その分類は国立国語研究所報告18「話しことばの文型(1)」における、表現意図の別に応ずる文表現の分類によることにする。大きくは、(1) 詠嘆表現、(2) 判叙表現、(3) 要求表現、(4) 応答表現に分けられ、従来の一般的な分類との対応でいえば、要求表現の中に質問的表現と命令的表現とが含まれる。

対話と独話との上で、右の分類による文の分布がどんな対比を示すか、次のような一つの報告がある。

	対 話	独 話
計	4,473文	784文
詠 嘆	164 "	0 "
判 叙	1,724 "	704 "
要 求	1,151 "	27 "
応 答	1,024 "	0 "
(問題)	406 "	53 "

対話は、雑談、窓口の問答、ラジオのクイズ番組等の6種類、計3時間10分49秒分の資料、独話は、講演、演説、説明、祝辞、ラジオの談話、ラジオの講義等の14種類、計3時間16分25秒分の資料についての調査である。

(「国立国語研究所年報10」から)

質問・命令(すすめ・希求・依頼まで含む。)の要求表現と応答表現とが相応じて対話を構成するばあいが多いということは、右の表によっても裏づけられる。また、ことばをやり取りするところから直接的な人間接触の親近感がうまれ、そこから感情表出的な詠嘆表現も出やすい、ということがいえないだろうか。

A オットメ ドウ?

B ウン、今 モウ トッテモ楽シイ。毎日 生きガイヲ感じ  
チャウワ。

A イイナー。年トルト ダメネ。

B ウフッ ニツシカ違ワナイノニ オバアサンミタイナコト  
イッテル。

「…ネ」「…デスネ」「…サ」などの間投助詞や一般の終助詞類は、情緒表出性のものであり相手にもちかける気分を表わすことの多いものだが、これを帯びる文も、独話より対話に多いと思われる。

文末の上がり調<sup>↗</sup>について、次のような調査結果がある。

対 話	33.9%
独 話	5.8%

(『言語生活』107号、大石「話し方の特徴」から)

↗が対話に多いことは、質問的表現の多いことと関連するが、それ以外にも、相手にもちかける気分——一種の感情表出的——の表現では↗があらわれるのである。

要するに、とりわけ対話では主情的表現が多く、文の性質上の種類の分布の上にも、文の形の上にもそれが反映されるのだが、それはまた、話しことばの上の傾向だともいえる。

6月ハ雨期ニハイリマスノデ、気候ノ変ワリヤスイ月デゴザイマス。コトニ夜ハムシ暑カッタリ冷エタリスルモノデスカラ。オ子サンガタノ健康ニ十分気ヲツケテ、暑イ夏ヘノ抵抗力ヲツケテアゲタイモノデゴザイマスネ↗ ソレニハ夜ノ安眠ガ一番タイセツデハナイデショウカ。オフトンカラミンナ転ゲ出シテシマウシ、カケブトンナドハスグヌイデシマウ。デ、オカアサマガタモイロイロト寝具ノクフウハシテイラッシュェイマスデショウガ、マズ直接ハダニマトウ寝巻キデゴザイマスネ↗ コレヲイロイロトオ考エニナツテハイカガデショウカ。(ラジオ講義)

独話でも上にあげた程度の表現は少なくない。このような事情  
的表現が話しことばの一威力をなすものだが、これのはたらきが、  
実践的には、その時その所によってさまざま複雑で、一口に標準  
などのいえるものでないことは、いうまでもない。

## 5 ことばづかい

「ことばづかい」ということばは、あまり明確な概念規定がな  
いと思うが、便宜に従って使うことにする。いわば場面に応ずる  
ことばの使い方というほどの意味で、敬語の使い分けや、共通語  
と方言との使い分けなどを、具体的には、取り上げようと思うの  
である。話しことばの表現上注目すべき事実と思われるものであ  
る。

### (1) 敬語の使い分け

敬語はもともと対人関係の意識にもとづく待遇表現のことばだ  
が、現代の敬語は特に、社交語としての性格をもっとも強くもつ  
とされている。すなわち、相手と自分との社会的関係の規定のし  
かたによって敬語の使い方がきまってくる。だから、人間の社会  
的關係が複雑になるにつれて敬語の使い分けは細くなるし（敬  
語の繁雑化）、人間関係のとらえ方が変動すれば、それに応じて  
敬語の基準も変わってくる（たとえば、教師に対する学生の敬語  
の減少ということが事実とすれば）。また、社交的訓練の足りな  
い若い層や地方社会の人人にとって、敬語が一般に苦手であるこ  
とも、当然である。

以上のような敬語が日本語の大きな特色の一つとされ、日本語の表現はつねに敬語による待遇表現の色づけを施されるといわれる。しかし、このことは、実は話しことばについていわれることであって、書きことばについては必ずしも適用されない。書きことばでは、一部の個人的通達のものを除いては、一般に、敬語は全然用いられない。そのばあい、敬語が用いられないのがぞんざいな表現なのではなく、敬語から全く解放されているのである。話しことばでは、書きことばのそれらに対応するようなマス・コミュニケーションのことばにおいても、敬語から離れてしまうことがない。

敬語ということばづかいから離れることがないというのは、やはり、話しことばの対話性による。すなわち、相手の現前する話しことばでは、対人意識がつねにことばを支配し、敬語のことばづかいを成り立たせるのである。

しかも、敬語のことばづかいの感情的影響はひじょうに強く、まさにことばの魔力とっていいものがある。日本語によって言語生活を営む日本人は、宿命的に敬語の魔力の支配のもとにおかれ、言語生活の能率は敬語に左右されるところが大きい。敬語の繁雑さがいわれ、また、敬語の混乱がいわれるが、敬語の問題が、言語生活の改善のための一課題であることはまちがいない。その中には、敬語の体系の整理に属する面があり、基準の立て方や用法の訓練といった使用に関する面がある。

## (2) 共通語と方言との使い分け

言語行動の場面の相違に応じて、多くの人々が、共通語と方言との使い分けを行なっている。二重言語生活というのは語感はよくないが、共通語と方言との二重言語生活というものを、国語教育においても、一般に指導の目標としている。この点やはり、書きことばとちがうところである。

国立国語研究所が鶴岡市で行なった言語調査の中に、どういう場面で共通語を使うかの調査があったが、それによると、相手が、家族の人→近所の顔知りの人→鶴岡の町で顔知りでない人→旅の人、という順に共通語を使うことが多いという結果だった。

(国立国語研究所報告5 「地域社会の言語生活」) 共通語の概念からいって、こういう対応はもっとも合理的だといえそうだが、話し手がそういう共通語意識によって使い分けをしているものかどうか、すなわち、内わの者とは仲間うちのことばで通じるが、よその人と通じあうためには共通語が必要、という意識をもって使い分けているのかどうかは、必ずしも明らかでない。そういう意識よりもむしろ、共通語は、よそいきのことば、改まったことばづかいという意識で使われるほうが、実際は多いのではなからうか。その意味で、共通語は地方社会においては、しばしば敬語と同質である。土地の人どうしの話し合いでも、あらたまった席でのことばには敬語と共通語とを使おうとする態度が出る。さらに、書きことばでは概してすべて共通語によろうとする傾向があるのも、書きことばが改まった立場での表現だということがおも

な理由となっていると考えられる。

「ものの言いようを知らぬ」という軽蔑<sup>へつ</sup>や自卑の中にも、共通語がよく話せないことを意味するばあいがしばしばあるし、「悪いことば」として指摘されているものの中に、乱暴なことば、野卑なことばなどにまじって、単に方言であるにすぎないことばがはいっていることもよくある。ここまで来ると、ことなる立場の価値観の混同という批判も出てくる。道徳的立場からの価値づけと、コミュニケーションの能率を問題にする立場からの価値づけとの混同ということである。しかし、共通語が一般の話し手にとっては、単に広く通用することばとして受け取られず、すなわち通用性だけで価値づけられず、内容的価値のあるものと考えられているという事実、また、それにはそれだけの理由があるということは認めざるをえない。共通語は一般人には、むしろ標準語として受け取られているとあっていい。また、現実について考えて、共通語は通用性だけのものだとして、標準語的性格を否認してしまうのも強弁である。標準語の規定を厳密に取れば、もちろん今日日本に標準語はできていないといわざるをえないが、現実の共通語がなんらかの意識的改良・選択の努力の結果を含んで成りたっており、また、そういう努力によって修正されつつあるものであることは事実で、いわば標準語的性格を帯びていることは否定されない。教育においても、こういう点を認めて適切な価値づけをもって共通語の指導を行なうことは望ましいというべきである。

### (3) 同音語音に対して

漢字のために、日本語には同音語がひじょうに多い。漢字を媒介とする同音語は、本質上、書きことば用としてできたものというべきだし、事実、書きことばで使われだすことが多いが、時をおかずに話しことばの上でも使われるようになるのが一般である。しかし、書きことばの上で使われる限りは無事だったものが、話しことばで使われだすとしばしばコミュニケーションのさまたげをなすことになる。同音語に限らず、新しくできた耳なれない字音語や字音略語にはこういうことが多い。

そこで、ことば整理の立場で、言いかえということがすすめられ、また、実行もされる。NHKが「難語言いかえ集」「農業用語言いかえ集」のようなものを作って、放送のために使っているなどは、そのもっとも計画的な実行の例である。個人としても、ばあいにより、この意味のことばづかいの用意をもつことは、珍しくない。能率主義・合理主義の立場からも、また、道義的な観点からも、こういう努力を忘れないということは話しことばの上のルールとなるべきものである。

明治のあるころ、「蓄音機」に対して「おとからくり」、「蒸汽車」に対して「むしけぐるま」などという言いかえ語が出たのは、成功せずに終わってしまったが、おそらく当時としても不自然を感じさせる言いかえであったろう。今日われわれの考える言いかえは、たとえば、

冗長→ながたらしい、くだくだしい、だらだらとした



焦土→焼け野原， 焼け土

瓦解→くずれる， つぶれる， たおれる， 総くずれになる

(NHK編「難語言い換え集」から)

などのように，既存の耳なれた表現をもって置きかえようとする試みである。耳になじみのないことばを，親しみのある，したがって通じやすいことばにかえようとするものである。それゆえ，意味については，厳密には，類義でまにあわせるやり方だということにもなる。類義でまにあわせるということは，忠実な表現のためにはがまんできないばあいもちろんあるが，日常的通達の多くのばあいには，それでさしつかえがない。通達の能率化のためにその面の多少の犠牲をしのぶのが，合理的であることが多い。また，表現しようとする内容にとって，はたしてその字音語がかけがえのないものであるかどうか，反省の余地のあるばあいも少なくない。

近年，いわゆる第二次言文一致の時代といわれて，書きことばの表現が話しことばの表現にある程度近よってきたことは事実だし，また，さらにこの傾向をおし進めて，書きことばをわかりやすいものにし，言語生活の能率を高めようという主張もある。そうあるべきことだと思うが，一方，話しことばについて，たとえば右のような字音語・同音語などに関する処置を適切に取って，その合理化を進めることが，言文一致の前提となるべきことでもある。その上での言文一致がもっとも意味のあるものになるし，また，話しことば・書きことばそれぞれの機能の別に応じて必ず

しも一致させる必要のないところをはっきりさせることができれば、それも言語生活を進歩させるものとなるであろう。